

I. 巻頭言

今年も窓下のヒトツバタゴの花が満開となりました。犬山の初夏を告げる風物のひとつです。年報の作成開始の時期でもあります。今年も以下のように霊長類研究所の平成25年度の自己点検評価資料として本年報をお届けします。

昨年度の最も喜ばしい出来事は松沢哲郎教授が文化功労者に顕彰されたことです。チンパンジーの特性を比較認知科学の視点から明確にし、「進化の隣人」をより身近な存在として社会に広く知らしめたことが評価されました。研究のひとつのあり方として、また社会への説明責任をはたす術の手本として優れた研究の推進でしょう。これは研究所の総合力を評価された結果でもあります。約40年に渡るチンパンジー研究の総合的評価は研究者だけでなく技術職員や非常勤職員のたゆまぬ勤しみの賜物ともいえるでしょう。またその基盤を支えたのは先達の生息地での精力的な生態行動観察であり、所内の多くの共同研究です。

大学を取り巻く昨今の環境は急激に変化しつつあり、国の方針として大学改革と国際化が大きく叫ばれています。もちろん、大学改革の波は研究所にも多大な影響を与えつつあります。定員削減がそのひとつです。研究所の組織改革も必要に迫られています。これまでむしろ好ましいと思われて進められてきた、個人研究に埋没した蛸壺式の研究スタイルではその波に抗えないからです。もちろん個人個人は自身の研究を穿って遂行しなければ物事の真髄には到達できません。しかし組織としてはそれをうまく取りまとめて社会に認められるものにする必要があります。大学改革と国際化は密接に関連しています。研究所の国際化は先達のお陰でかなり充実してきました。海外調査や共同研究がその礎となっていますが、積極的な研究者の招聘や国際コースによる海外からの大学院生誘致等によって、院生は30%、研究員は45%、教員（特定を含む）は10%に迫っています。その功績の結果として、国際高等教育院の英語教育の教授1名（米国人）が採用され定員化されました。

これらの国際化の推進を基盤にして研究所の組織の見直しをする必要があります。共同利用・共同研究拠点の報告書をご覧頂くとご理解いただけますように、3年前から開始した拠点事業の国際化推進によって、海外からの共同利用研究の採択が年々増加しています。平成25年度は9件、平成26年度は11件です。これはその他の推奨している派遣・招聘プログラムとともに国際化のネットワークの絆を強化する手段としてとても重要な事業のひとつと考えます。国際化の推進とともに将来の霊長類学の在り方も検討する必要があるでしょう。基礎研究の推進は研究所の基本姿勢ですので、これを堅持することは研究所の発展に欠かせませんが、ヒトのモデルとしての位置づけも重要でしょう。本格的な応用的利用は他研究機関に委ねることは今後も変わりませんが、その入り口の基礎データと法的基盤を我々も検討しておく必要性は高いと考えます。そのことは47年前に学術会議から提出された研究所設立のための内閣総理大臣への勧告文章にも謳ってあります。

今後も基礎研究、くらし、からだ、こころ、ゲノムの観点から基礎研究を重視し、さらに社会に貢献できる研究に邁進して参ります。本年報を研究所の自己点検資料として評価していただき、さらなるご指導ならびにご鞭撻を頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

所長 平井啓久